

立野遺跡

—町道立野中道線外道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2021年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

すさみ町は、和歌山県西牟婁郡に位置し、東は串本町と古座川町、西と北は白浜町と境をなしています。南は太平洋に臨み、枯木灘海岸をはじめとして古来より風光明媚な地として知られています。

立野遺跡は、近畿自動車道紀勢線の建設に伴い平成 22 年度に道路の本線部分の発掘調査（第 1 次）が行われ、弥生時代前期に埋積した自然流路が見つかりました。自然流路には多くの木材が折り重なり、それらの間からは、木製品や土器、石器などの遺物が多量に出土しました。それ以後も複数次にわたる調査が行われ、重要な発見が相次いでいます。これらの調査の成果から旧周参見川の流域に形成されていた、いにしえの人々の生活の解明に大きく寄与するところとなっています。また、第 1 次調査で出土した木製品、石器、土器計 532 点は、平成 29 年 3 月 17 日に和歌山県指定文化財となりました。

今回の調査は、町道立野中道線外道路改良工事に先立って当文化財センターが発掘調査を実施したものであり、その成果をまとめ発掘調査報告書として刊行する次第です。今回の調査では、これまであまり調査されてこなかった立野遺跡南端部の様相を明らかにすることができました。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

令和 3 年 1 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井 敏雄

例 言

- 1 本書は、和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見に所在する立野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、町道立野中道線外道路改良工事に伴うもので、令和2年度に発掘調査及び報告書作成にともなう出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、すさみ町の委託を受け和歌山県教育委員会（以下、県教育委員会とする。）指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、当文化財センターとする。）が実施した。
- 4 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は下記の通りである。

事務局長（管理課長兼務）	井上 拳宏
事務局次長	立花 佳樹
埋蔵文化財課長	丹野 拓
発掘調査及び出土遺物等整理業務担当	濱崎 範子
- 5 本書の編集・執筆、遺構及び遺物写真の撮影は濱崎が行った。
- 6 本事業の遂行にあたり、地元自治会、地域住民の方々から多大なご協力を頂いた。ここにあらためて感謝の意を表する。
- 7 出土遺物はすさみ町教育委員会が保管し、発掘調査及び出土遺物等整理業務において作成した実測図やデジタルデータ、台帳及び写真などの記録資料は当文化財センターが保管している。

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理作業は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006. 4）に準拠して行った。
- 2 調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（世界測地系）第VI系のもので、値はm単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P+）の数値である。
- 3 調査で使用した調査コードは、20-41・002（2020年度-すさみ町・立野遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。
- 4 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲している。遺構番号は調査区ごとに1からの通し番号である。
- 5 遺物図版の縮尺は、原則として1/4とし、石器類に関しては1/2とした。また、遺物写真の縮尺については特に統一していない。
- 6 遺構等の土層について記載した土色及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本彩色研究所監修『新版標準土色帖』（2016年版）に基づいて記録した。

本文目次

第1章 遺跡の環境と既往の調査	1	第4章 調査の成果	6
第1節 地理的環境と現況	1	第1節 調査区1	6
第2節 立野遺跡と周辺の遺跡	2	1 基本層序	6
第3節 既往の調査	2	2 調査の成果	6
第2章 調査の経緯と経過	3	第2節 調査区2	6
第1節 調査に至る経緯	3	1 基本層序	6
第2節 発掘調査及び出土遺物等整理業務	4	2 調査の成果	6
第3章 調査の方法	4	第3節 出土遺物	11
第1節 掘削記録作業	4	第5章 まとめ	11
第2節 地区割	5		

挿図目次

図1 立野遺跡と周辺の遺跡	1	図5 調査区2 遺構配置図・土層断面図	8
図2 既往の調査範囲	3	図6 調査区2 平面図	9
図3 地区割図	5	図7 遺構断面土層図	10
図4 調査区1 平面・南壁土層断面図	7	図8 出土遺物実測図	13

表目次

表1 出土遺物一覧	13
-----------	----

写真図版目次

写真図版1	1 調査地遠景（北から）	写真図版3	1 調査区2-1 北壁土層断面（南から）
	2 調査区1 全景（東から）		2 調査区2-1 南サブトレ北壁土層断面（南から）
	3 調査区1 南壁土層断面（北東から）		3 調査区2-2 西壁土層断面（東から）
写真図版2	1 調査区2-1 全景（南から）	写真図版4	遺構4～31 断面土層
	2 調査区2-2 西部全景（北から）	写真図版5	出土遺物
	3 調査区2-2 全景（東から）		

改善する目的で土管や「ソダ線」と呼ばれる暗渠排水溝などが多数設置されている。今回の調査区においても、土管や暗渠状の排水溝を確認している。

第2節 立野遺跡と周辺の遺跡（図1）

すさみ町では、立野遺跡のほかには原始・古代の遺跡は少なく、小泊遺跡（6）で弥生土器が見つかっている。古墳時代後期の上ミ山古墳（1）は昭和45年に周参見湾を望む丘頂（標高81m）で宅地造成中に発見された直径約40m、高さ4mの大型の円墳で、紀南地方では数少ない古墳の一つである。内部主体は横穴式石室2基と箱式石棺1基、計3基が存在していたが、造成時に墳頂部に築かれた横穴式石室以外は削平され、詳細は不明である。残存する横穴式石室は南に開口する片袖式で、玄室の規模は長さ2.3m、幅2.1m、扁平な割石を小口積みして構築している。床面は板石により石障を設け、3つに区画されていた。遺物は須恵器や武器・工具・玉類が出土している。小泊遺跡からは、須恵器や製塩土器などが出土していることから、海岸沿いでは製塩遺跡が展開していたと考えられる。

古代の遺跡は明らかになっていないが、律令制下では牟婁郡に属し、「和名抄」にある牟婁郡5郡のうち、「三前郷（みさきのごう）」に属していたと考えられる。

鎌倉時代前期には、荘園として「周参見荘」の名が史料に現れ、鎌倉時代後期には那智山領であったことが伺える。戦国時代には、日置川下流域を掌握する安宅氏とともに熊野水軍の一翼を担った周参見氏が周参見川下流域に本拠をおき、神田城跡（3）・周参見城跡（7）・中山城跡（4）・藤原城跡（9）・立野城跡（10）・駒詰城跡（11）等の山城を築いたとされる。これらの城は土塁や堀切などが構築され、防御性が高く、狭い地域内に多くの城が存在する状況は、西牟婁郡白浜町に所在する安宅氏城館跡と類似する。

第3節 既往の調査（図2）

立野遺跡での既往の調査は、近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査（第1次調査）、すさみ西IC建設に伴う発掘調査（第2次調査）、近畿自動車道紀勢線通信施設建設に伴う発掘調査（第3次調査）、すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査（第4次調査）として当文化財センターが実施している。また、高速道路交通警察隊分駐隊舎建設に伴う発掘調査（第5次調査）、すさみ町集合住宅建設に伴う発掘調査（第6次発掘調査）として和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課とする。）が実施している。

第1次調査では、調査区1・2において弥生時代から古代にかけての溝状遺構、土坑、落ち込み、柱穴、杭列を検出している。調査区4・5においては、弥生時代後期の水田区画の他、弥生時代から中世までの各時代の水田が検出されている。調査区3においては、弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期から古代にかけての自然流路と堰状遺構を検出している。このうち弥生時代前期の自然流路からは、弥生土器、突帯文土器、石器の他、木製品が多量に出土した。木製品は、容器、農具、工具及び武器など多種多様であり、製作途中の未成品が存在することや磨製石斧や削器が出土することから、木製品の加工・製作が行われていたと考えられる。出土遺物の一部はその重要性を評価され、「立野遺跡出土品」として平成29年3月に県指定文化財となっている。

第2次調査でも、第1次調査で検出された自然流路のうち、弥生時代中期の自然流路の延長部分や古墳時代から古代にかけての水田域、溝、自然流路を検出しており、調査範囲北東と南西にさらに遺構が展開することが判明した。

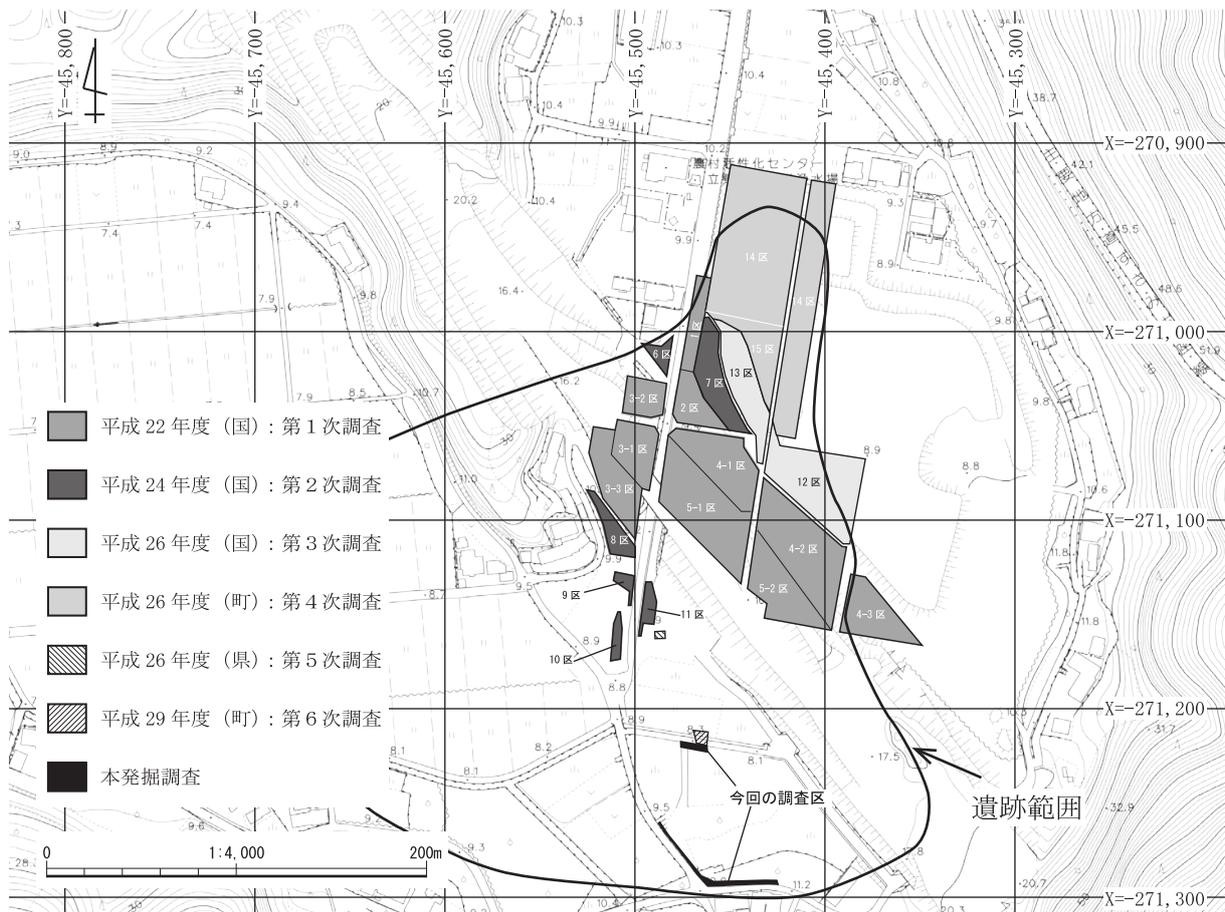


図 2 既往の調査範囲

第 3 次調査では、第 1 次調査の東側の調査を実施しており、水田域や溝及び自然流路を検出している。

第 4 次調査では、第 1 次調査の北側微高地付近を調査しており、古代の掘立柱建物跡のほか、弥生時代前期から中期の土壌墓、溝を確認しており、さらに北側には居住域の存在が想定された。

第 5 及び第 6 次調査は第 2 次調査地の南側で実施しており、第 2 次調査で確認された弥生時代中期の自然流路の南延長部を検出した。第 6 次調査における流路上層の出土遺物から、これまで弥生時代中期と考えられてきた自然流路が弥生時代前期に遡る可能性が指摘されている。

第 2 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

令和 2 年、すさみ町により町道立野中道線外道路改良工事が計画され、その予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である立野遺跡に該当した。立野遺跡はこれまでも近畿自動車道紀勢線関連事業、すさみ町公共施設移転事業及び高速道路交通警察隊分駐隊宿舍建設に伴い記録保存目的の発掘調査が実施されていた。また、平成 29 年度には、今回の工事予定地と隣接地において集合住宅建設に伴う確認調査が実施されており、平成 29 年 6 月 21 日付け文第 0610001 号により埋蔵文化財が展開する範囲において埋蔵文化財が掘削されて損壊されるなどの場合は、記録保存目的の本発掘調査が必要である旨の通知が県教育委員会より行われている。このため、すさみ町と県教育委員会とで協議が行われ、本発掘調査が実施されることとなり、令和 2 年 7 月 29 日付け文第 07290003 号で、当文化財センターに発掘調査等

業務の実施計画書提出依頼があった。このため、当文化財センターでは実施計画書を提出し、令和2年8月17日にすさみ町と「町道立野中道線外道路改良工事に伴う立野遺跡発掘調査等業務」として契約を行い、調査に着手した。

第2節 発掘調査及び出土遺物等整理業務

調査では、現状の造成土及び造成前の表土の一部についてすさみ町が掘削し、すさみ町が掘削した部分より下位について当文化財センターが発掘調査を行った。発掘調査に伴う工事は「町道立野中道線外道路改良工事に伴う立野遺跡発掘調査工事」として、株式会社関本工務店に再委託し、令和2年9月11日から同年10月30日までの工期で実施した。調査地は、立野遺跡第6次発掘調査の南隣接地（調査区1）と遺跡の南端部（調査区2）であり、当初の調査面積は222.3㎡であったが、調査区2において一部が防火水槽やコンクリート擁壁によって攪乱を受けており、遺構面が遺存していないことが判明したため、その部分を除き、188.3㎡の調査を行った。現地調査は、令和2年9月28日に開始し、同年10月30日で終了した。調査期間中の10月23日には、現地公開を開催し、近隣住民を中心に20名の参加を得た。

現地調査終了後、土器類コンテナ1箱、石器類1点を対象に出土遺物等整理業務を実施した。これらの出土遺物について、水洗、注記、登録、実測、写真撮影等一連の作業を行うとともに、現地で作成した調査区や遺構実測図のトレース作業、組版等を行い、調査報告書を刊行した。



写真1 足場からの写真撮影



写真2 現地公開

第3章 調査の方法

第1節 掘削記録作業

発掘調査は「(財)和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル(基礎編)」(2006.4)に基づき、実施した。表土・耕作土等については重機で掘削し、既往調査や県教育委員会の確認調査で遺物包含層と確認された土層（調査区1は第4層、調査区2は第3層）以下については人力で掘削を行った。

調査区の平面図、土層断面図及び遺構断面土層図については、全て縮尺1/20で測量・図化した。写真撮影については35mmフルサイズデジタルカメラ及び中判デジタルカメラを使用して撮影した。デジタルカメラの撮影画像はRAW形式及びJPEG形式で保存した後、RAW現像を行い、TIFF形式で保存している。撮影用足場は調査区の全景写真撮影時に設置した。

第2節 地区割

立野遺跡の調査区の区割は、当文化財センターの既往調査で設定した基点（ $X = -270,000 \text{ m}$ 、 $Y = -45,000 \text{ m}$ ）からX軸に沿って西方向と、Y軸に沿って南方向へ100 mごとにX軸方向にA～Yのアルファベット（大文字）を、Y軸方向には1～25のアラビア数字を付して、区画名を「A 6」等とする100 m四方の範囲を1単位をした大区画を設定した。従来であれば、同様の方法で更に4 m四方の小区画を設定するが、今調査区の形状と調査面積が狭小であったことから、作業効率を考え、調査区1は調査区西端から、調査区2は調査区北端より4 mを単位として順にNo.1、No.2と任意の小

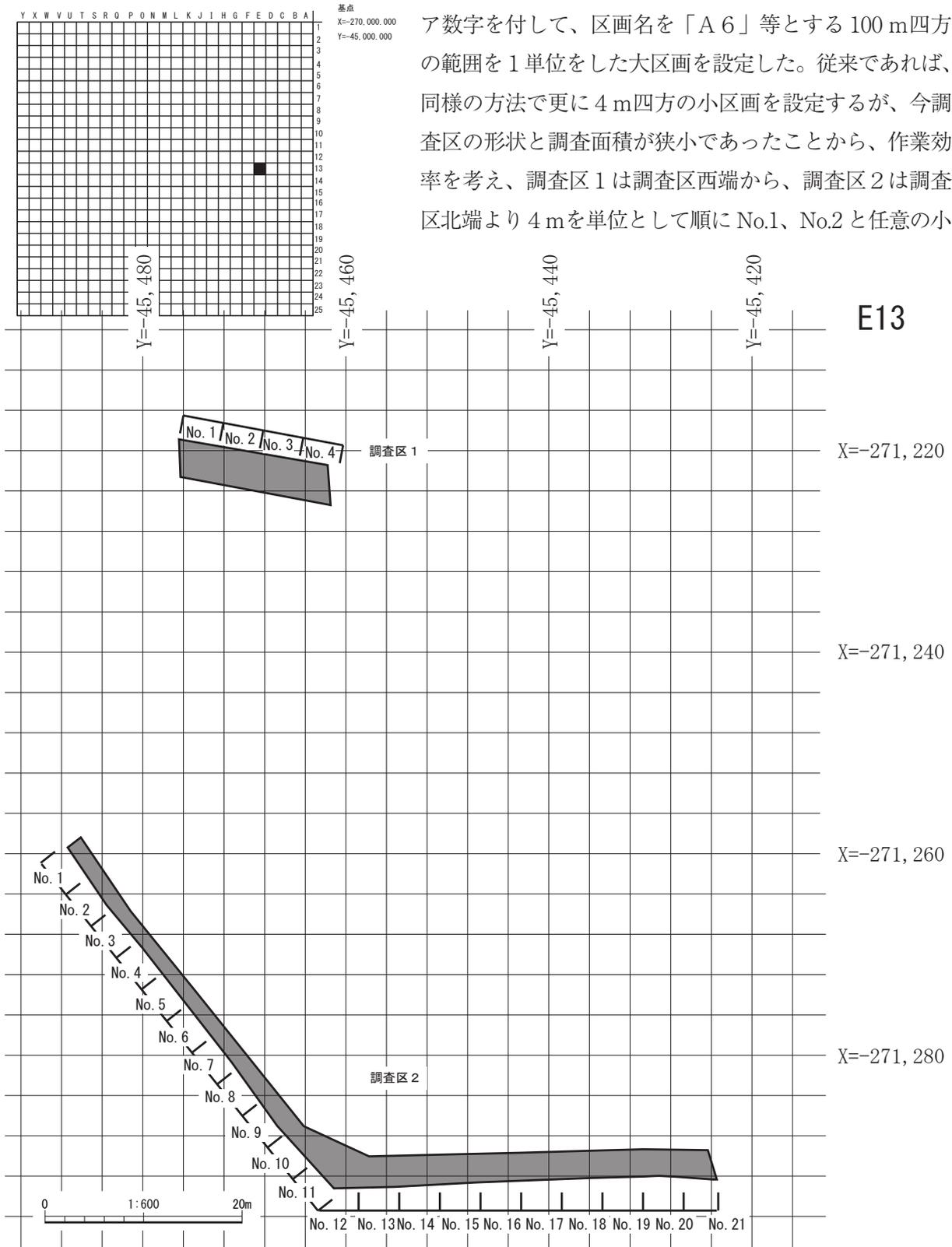


図3 地区割図

区画を設定し、実測図の作成に座標と併用した。また遺物の出土位置についても同様で、これらについては「A 6 No.1」等大区画 - 小区画の組合せにより標記している。

第4章 調査の成果

第1節 調査区1

1 基本層序

調査区1の基本的な土層は第0～6層に区分した。

第0層は現状の造成土、第1層は近現代の耕作土である。第2層は灰黄褐～黄色を呈するシルト層である。既往調査から近世以降の耕作土と考えられる。第3層は暗灰黄～にぶい黄色を呈するシルト層で、既往調査から立野遺跡において鍵層と認識される遺物包含層である。第4層は黄褐色を呈するシルト層で、既往調査から弥生時代～古墳時代の遺物を包含する遺物包含層である。第5層は灰～灰白色を呈するシルト層で、細砂が混じる。調査地における基盤層である。第6層は5層下で一部確認した黄灰～明緑灰色を呈する細砂～中粒砂を含むシルト層である。自然木・有機物を多量に含み、下位になるに従い、層中に含まれる砂粒形が大きくなることから、弥生時代以前の自然流路の堆積層と考えられる。

2 調査の成果 (図4、8)

調査区1は調査地北側に位置し、第6次調査の調査区2に南接する幅3.6m、延長15.0mの平行四辺形状の調査区である。既往調査と同様に第4層下で南北方向に流れる自然流路を確認した。自然流路の西側については、第6次調査と同様、弥生時代以前の自然流路と重複するため平面上で肩部を明確に検出できなかったが、調査区南壁土層断面で確認できた肩部により、最大幅約8.4m、最大深度約0.7mと確認できた。この自然流路は、上位から灰黄色細砂混シルト、灰オリーブ色シルト、灰オリーブ色シルトから灰白色中粒砂～粗砂が堆積しており、それぞれ上層(a1層)、中層(a2～a3層)、下層(a4～a5層)に区分できる。また、自然流路内の自然木は流路方向に平行して出土したものもあり、水流に押し流され埋没した状況と考えられる。以上の調査成果は、おおむね第6次調査の成果に合致する。一方で、既往調査で確認された木杭等や水利遺構は今回確認できなかった。

第2節 調査区2

1 基本層序

調査区2の基本的な土層は第0～5層に区分した。

第0層は現状の造成土及び攪乱、第1層は近現代の耕作土層である。第2層は近代以降の耕作土または河川の氾濫堆積と見られる砂層である。第3層は黄灰色・暗灰黄色もしくは明黄褐色を呈する砂層で、中世以降の遺物包含層である。調査区南半部では確認できなかった。第4層は黄灰色～暗灰黄色を呈するシルト混じりの砂層もしくは、灰色を呈するシルト層で、立野遺跡南端部における基盤層と見られる。第5層は黄灰色シルト層、もしくは暗灰黄色～にぶい黄色の砂層である。砂層はやや粒径が粗く、円礫を多量に含むことから、河川の氾濫堆積層もしくは旧河道の堆積層の一部とみられる。

2 調査の成果

調査区2は、立野遺跡南端部にL字状に設定した全長81.0mの調査区である。調査区内は近代以降の石垣や防火水槽により大きく攪乱を受けており、記録作業上、防火水槽より北側を調査区2-1、南

- 自然流路
- a-1 2.5V6/2灰黄色細砂混シルト、木片含
 - a-2 5V5/2灰オリーブ色～10VR5/3にふい、黄褐色極細砂～細砂混シルト、木片含
 - a-3 5V5/2灰オリーブ色シルト混細砂
 - a-4 5V5/2灰オリーブ色シルト混細砂、木片多量含
 - a-5 2.5V7/1灰白色中粒砂～粗砂 シルトわずかに含む、木片多量含

- 1-1 10VR5/2灰黄褐色シルト混細砂、鉄分含
- 1-2 2.5V5/2暗灰黄色細砂混シルト
- 1-3 2.5V5/2暗灰黄色シルト混細砂、鉄分含
- 2-1 10VR4/2灰黄褐色細砂混シルト、10VR7/1灰白色シルトブロック含、鉄分沈着あり
- 2-2 10VR4/3にふい、黄褐色シルト、極細砂極少量含
- 2-3 2.5V6/3にふい、黄褐色シルト、極細砂極少量含
- 3-1 2.5V5/2暗灰黄色シルト 極細砂～細砂含、鉄分含
- 3-2 2.5V6/3にふい、黄褐色シルト 細砂含、鉄分含
- 4 2.5V5/2黄褐色シルト、木片少量含
- 5-1 N7/灰白色シルト混細砂、鉄分沈着あり
- 5-2 10V4/1灰白色シルト混細砂
- 6-1 2.5V6/1黄灰色細砂～中粒砂混シルト
- 6-2 2.5V4/1黄灰色中粒砂混シルト 木片多量含
- 6-3 10GV7/1明緑灰色シルト 5V4/2灰オリーブ色極細砂～細砂混シルトマール状に混じる、木片多量含

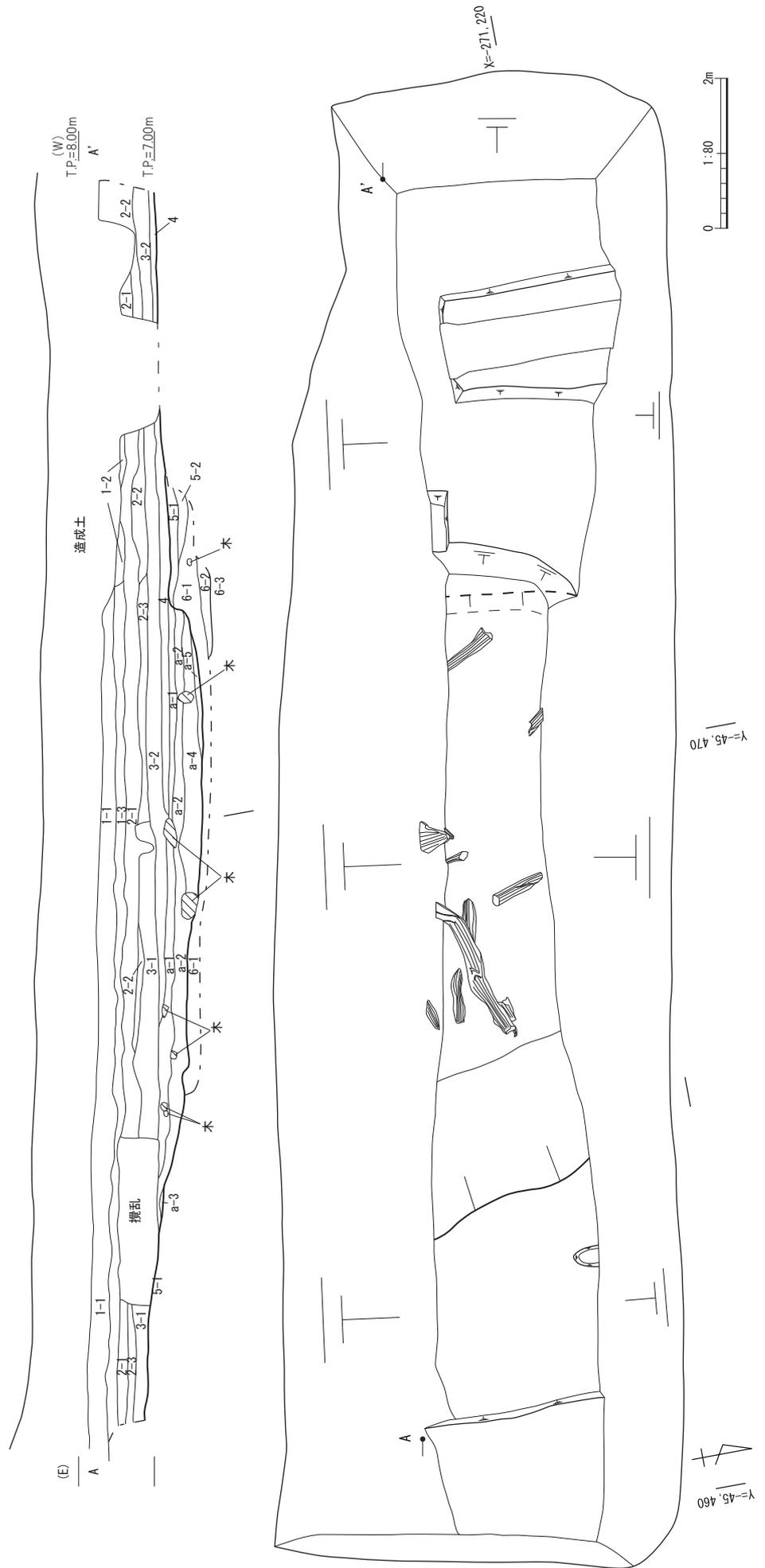


図4 調査区1 平面・南壁土層断面図

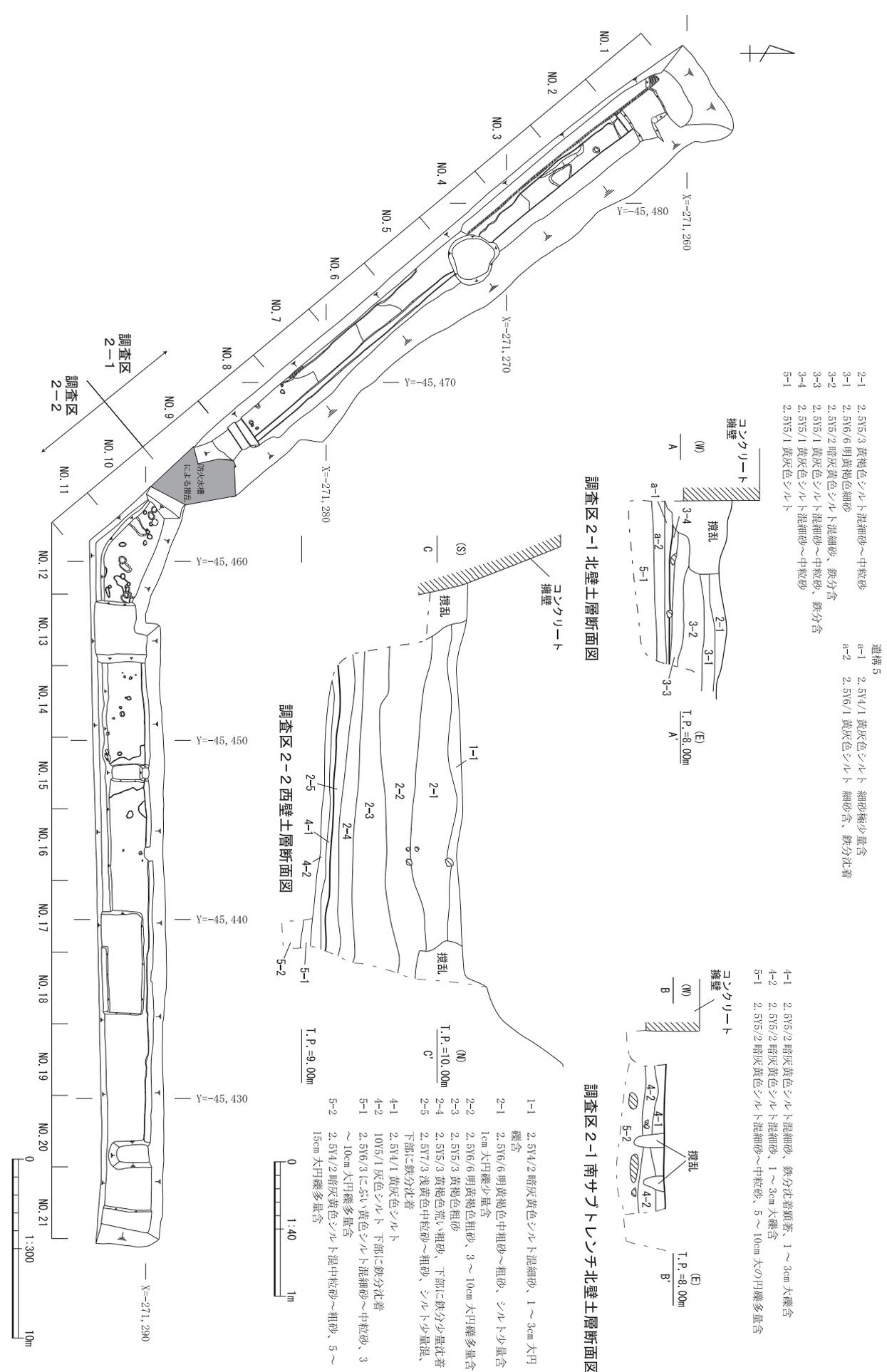
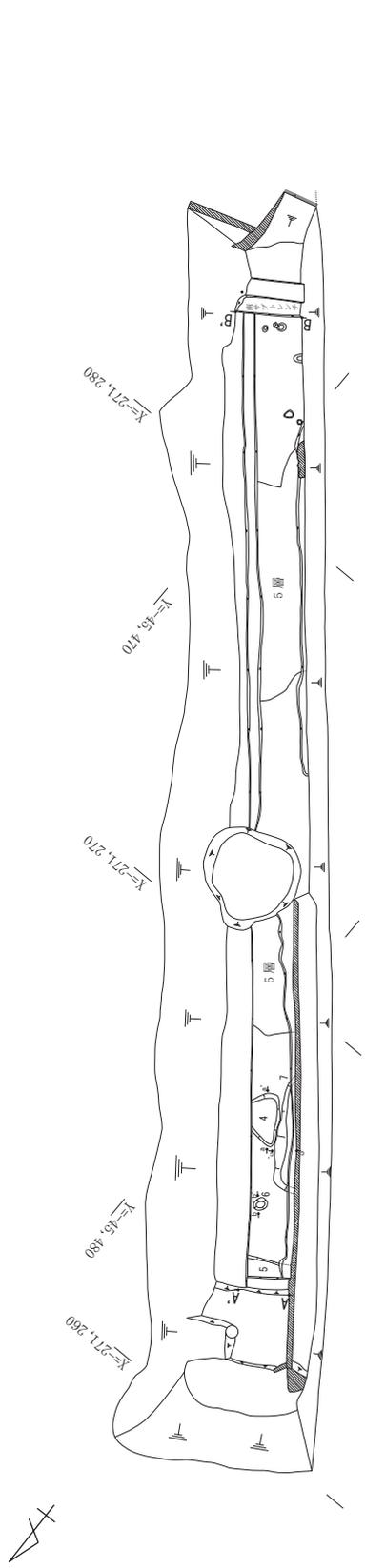
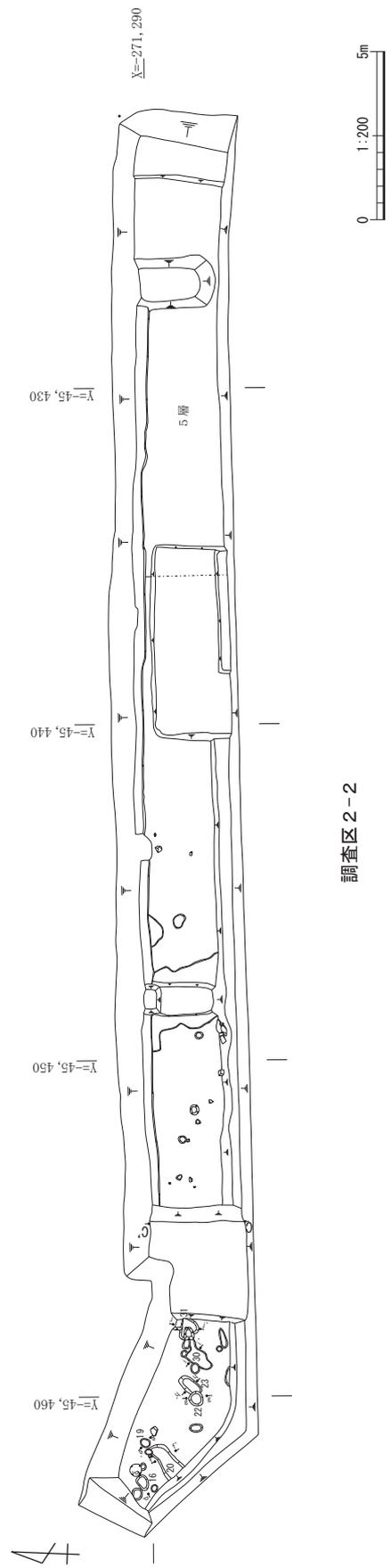


図 5 調査区 2 遺構配置図・土層断面図



調査区 2-1



調査区 2-2

図 6 調査区 2 平面図

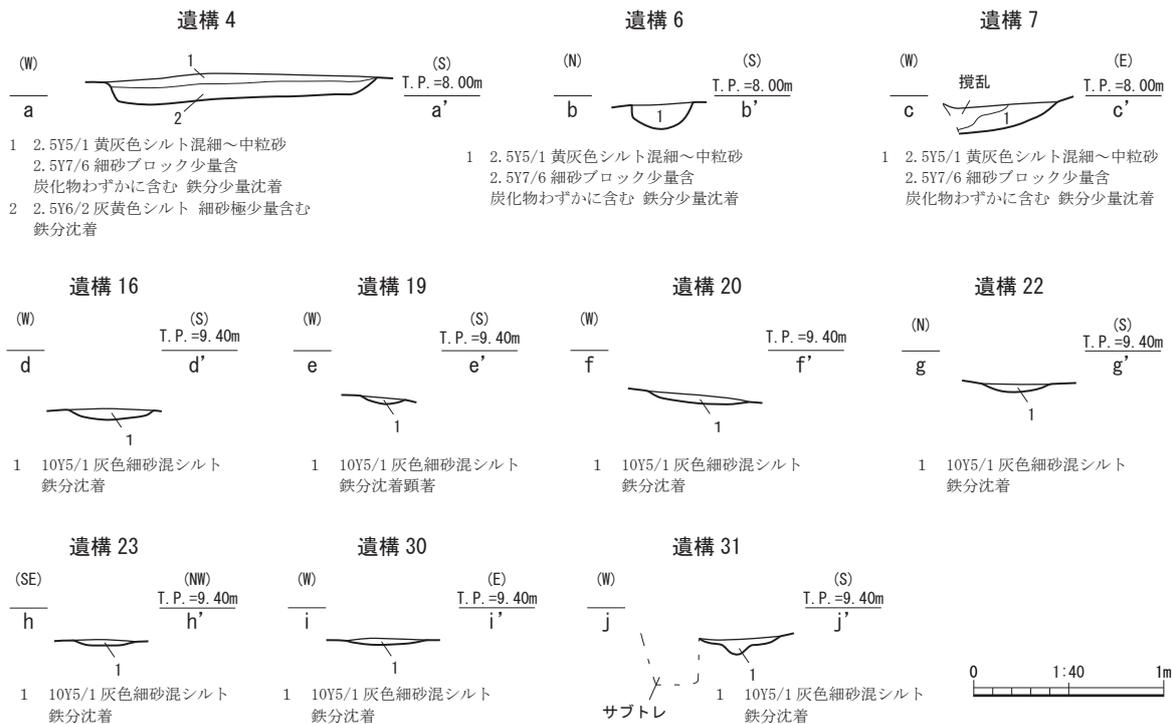


図7 遺構断面土層図

側を調査区2-2とした。遺構は4層上面で確認している。検出した遺構は調査区2-1北部、調査区2-2西部に集中しており、いずれの遺構も残存深度が浅く、遺存状況は良くない。これは後世の河川氾濫等により、第4層が削平されたためと考える。また、今回確認したいずれの遺構からも出土遺物を全く確認できなかったため、検出した遺構の時期について、詳細は不明である。

遺構 4 (図7、写真図版4) 調査区2-1北側で確認した平面形が歪な楕円状の土坑である。規模は南北長1.48m、東西長0.78m、残存の深さは0.15mで、埋土は2層に分層でき、上層はシルト混じりの黄灰色砂、下層は黄灰色シルト層で鉄分沈着が見られる。

遺構 5 (図7、写真図版3) 調査区2-1北端で確認した浅い土坑である。規模は南北長0.34m、東西長1.22m、残存の深さは0.14mで遺構の大半が調査区外へ続いている。埋土は、黄灰色シルト層2層に分層することができる。

遺構 6 (図7、写真図版4) 調査区2-1北側で確認したピットである。規模は直径0.34～0.4m、残存の深さは0.12mで、埋土は遺構4の埋土1層と同じである。

遺構 7 (図7、写真図版4) 調査区2-1北側で確認した平面形が楕円状の土坑である。南北長3.32m、東西長0.6m、残存の深さは0.14mで西半部を攪乱により削平されている。埋土は遺構4の1層と同じである。

遺構 16 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した平面形が楕円状の土坑である。南北長0.32m、東西長0.46m、残存の深さは0.06mである。灰色シルトに砂が混じる土層で鉄分の沈着が見られる。

遺構 19 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した小穴である。直径0.3m、残存の深さは0.03mと非常に浅い。埋土は灰色の砂が混じるシルトだが鉄分沈着が顕著に見られる。

遺構 20 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した平面形が歪な楕円状の土坑である。南北長は1.12m以上、東西長は0.64mで残存の深さは0.04mと非常に浅い。埋土は遺構16と同様である。

遺構 22 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した小穴で、遺構23に後出する。直径0.44m、

残存の深さは0.04 m。埋土は遺構 16 と同様である。

遺構 23 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した平面形が楕円状の土坑で遺構 22 に先行する。南北長0.76 m、東西長0.40 m、残存の深さは0.04 mで埋土は遺構 16 と同様である。

遺構 30 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した平面が不整形な土坑である。長軸1.00 m、短軸0.46 m、残存深度0.04 m、埋土は遺構 16 と同様である。

遺構 31 (図7、写真図版4) 調査区2-2西部で確認した平面が楕円状の土坑である、南北長が0.58 m、東西長が0.64m以上、残存の深さは0.08 mである。埋土は遺構 16 と同様である。

この他、調査区2-1南半部及び2-2において河川の氾濫堆積と見られる砂層(第2層)を確認している。この砂層は調査区2-2北壁土層断面の観察から、東から西に向かって堆積しており、また、下層は粒径が大きくなる、円礫を多量に含むといった特徴が見られる。層中に極少量の染付細片を含んでいたことから、近世から近代にかけて堆積した土層と判断する。また、基盤層下の第5層においても円礫を多量に含む土層を確認しており、一部確認した第5層下において1.0～1.7 m以上砂礫層が堆積する状況を確認した。

第3節 出土遺物(図8、写真図版5)

今回の発掘調査では、調査区1・2いずれにおいても遺構から遺物は確認できなかったが、包含層及び砂礫層から遺物が出土している。

調査区1からは、第4層より石器(1)が出土した。既往調査でも確認された地元産出の頁岩製であり、未成品と見られるが搔器の可能性はある。

調査区2からは、第3層より土師器(2)、瓦器(3)、陶器(4)が出土している。土師器(2)は口縁端部のみで器種は不明であるが、内外面にヨコナデが残る。瓦器(3)は小型の皿であるが、内外面の摩滅が著しく、調整は不明である。陶器(4)は常滑焼もしくは備前焼の甕体部である。内外面に板状工具によるナデが確認できた。調査区2-2第4層上部より磁器(5)が出土している。肥前系磁器の瓶底部と見られ、高台外側に圏線が一条巡る。17～18世紀代のものか。第5層からは常滑焼と見られる甕(6)の体部が出土している。内面は板状工具によるナデ、外面はタテ方向にハケを行った後ヨコ方向にナデを施すが、一部タテ方向のナデも残る。

いずれも小片であり、詳細な時期を特定するには至らなかった。

第5章 まとめ

第2・5・6次調査で検出した、北から南方向へ延びる弥生時代中期の自然流路について、今回の調査区1においても同様に検出した。第6次調査調査区2で確認された流路のうち西側流路とみられる。一方で第6次調査においては、これまで弥生時代中期とされてきたこの自然流路について、その堆積上層から出土した土器から弥生時代前期中段階まで遡る可能性が指摘されたが、今回の調査では時期を特定できる遺物が出土しておらず、自然流路の時期について断定することができなかった。

一方、調査区2では、立野遺跡の南端部の様相が一部明らかとなった。出土遺物が乏しく、断定できないが、17世紀ごろまで遺跡南端部は周参見川の旧流路であったと考えられる。調査区2の第5層のうち砂礫層が約1.0～1.7 m以上堆積していることを確認しており、河川氾濫堆積層もしくは自然流路そのものの堆積層と推定する。流路上部に堆積したシルト層は、上部が暗色化していることから、部

分的に陸化していたとみられ、ごく一部に人々の活動痕跡が残る。自然流路が埋没した時期については「慶安の山津浪」（1652）による可能性が高いと考えられ、詳細な文献史料は残っていないものの、口伝と現地状況を合わせて解説した『すさみ町誌』によると、慶安の山津浪以前、周参見川の本流は立野を流れていたが、この水害で大関地の大堰を突破して背戸山沿いに流れたとされる。この水害により立野地区を流れていた川は田に変わったとしており、水害後の風景は、水田耕作地が広がる現況の立野地区のものとはほぼ一致する。第1次調査において立野遺跡周辺の平野部、その西と東の山際に谷（自然流路）があることが想定されており、西の谷が既往調査や今回の調査区1で確認した弥生時代中期の自然流路とすると、今回調査区2で確認した第5層の氾濫堆積は平野部東側に想定された旧周参見川もしくはその支流によるものと推定できる。

<参考文献>

周参見尋常高等小学校編 1910『周参見村郷土誌』

すさみ町誌編さん委員会編 1978『すさみ町誌 上巻』

2013『立野遺跡－近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書－』公益財団法人和歌山県文化財センター

2014『立野遺跡－近畿自動車道紀勢線事業に伴う第2次発掘調査報告書－』公益財団法人和歌山県文化財センター

2014『立野遺跡－近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査報告書－』公益財団法人和歌山県文化財センター

2015『立野遺跡－すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書－』公益財団法人和歌山県文化財センター

2016『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成26年度－』和歌山県教育委員会

2020『立野遺跡－すさみ町集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会・公益財団法人和歌山県文化財センター

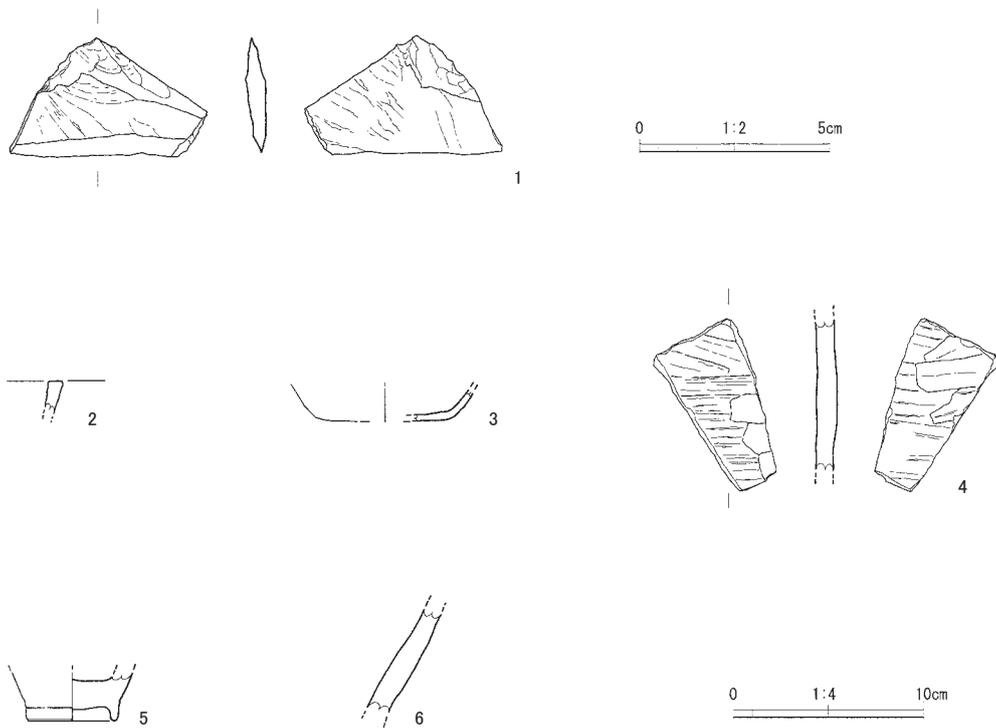


図8 出土遺物実測図

表1 出土遺物一覧

土器一覧 径の()は復元による推定値、高さの()は残存高

報告書 番号	図・ 図版番号	調査区 地区	遺構 層位	種類	器種	法量 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調	技法・形態上の特徴	備考
						口径 cm	高さ cm	底径 cm						
2	2	2区 No.1	3層	土師器 か	壺か (口縁 端部)	—	(1.8)	—	5% 以下	やや粗 15mm以 下の白色 粒少量含 む	良好	内外面 10YR7/3 にぶい黄橙色 断面 10YR7/1 灰白色	内外面ヨコナデ	断面 のみ
3	3	2区 No.4	3層	瓦器	皿 (底部)	—	(1.7)	(7.1)	10%	密 1mm以 下の灰色 粒を微量 含む	やや軟質	内面 10YR7/2 にぶい黄橙色 外・断面 2.5YR8/2 灰白色	摩滅のため内外面調整不明	反転 復元
4	4	2区 No.2	包含層 or 攪乱	常滑	甕 (体部)	—	(6.9)	—	5% 以下	やや粗 1.5mm以 下の灰 色・黒色 粒を少量 含む	良好	内面 2.5YR5/4 にぶい赤褐色 外面 5YR4/2 灰褐色 断面 2.5YR5/4 にぶい赤褐色	内外面 板状工具 (ハケ状か) によるなで	断面 内外の 俯瞰図
5	5	2区 No.13	4層	磁器	瓶か (底部)	—	(2.6)	(4.5)	5%	精良	良好	露胎 N8/0 灰白色 釉 5B4/1 暗青灰色	内面見込みに発泡	反転 復元
6	6	2区 No.3	5層	常滑 or 備前	甕 (体部)	—	(5.5)	—	5%	密 0.5mm以 下の白色 粒を微量 含む	良好	内面 5YR6/1 赤灰色 外面 5YR4/1 暗赤灰色 断面 N6/0 灰色	内面 板状工具によるナデ 外面 タテ方向のハケ後ヨ コ方向のナデ 一部タテ方向のナデ も残る	断面 のみ

石製品一覧

報告書 番号	図・ 図版番号	調査区 地区	遺構 層位	種類	器種	法量 (cm)			重さ g	石材	残存率	技法・形態上の特徴	備考
						最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm					
1	1	1区 No.1	4層	石製品	搔器か	5.2	3.15	0.6	—	頁岩	—	—	未成品



1 調査地遠景(北から)



2 調査区1 全景(東から)



3 調査区1 南壁土層断面(北東から)



1 調査区2-1 全景(南から)



2 調査区2-2 西部全景(北から)



3 調査区2-2 全景(東から)



1 調査区2-1 北壁土層断面(南から)



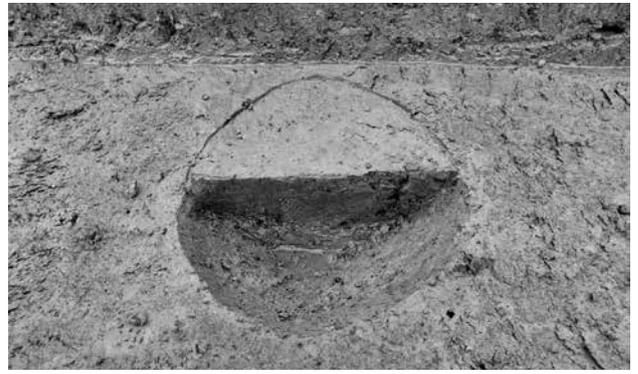
2 調査区2-1 南サブトレ北壁土層断面(南から)



3 調査区2-2 西壁土層断面(東から)



1 遺構4断面土層(西から)



2 遺構6断面土層(西から)



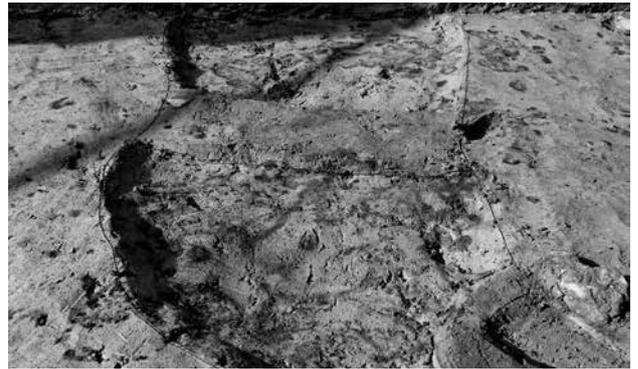
3 遺構7断面土層(南から)



4 遺構16断面土層(南から)



5 遺構19断面土層(北から)



6 遺構20断面土層(北東から)



7 遺構22断面土層(西から)



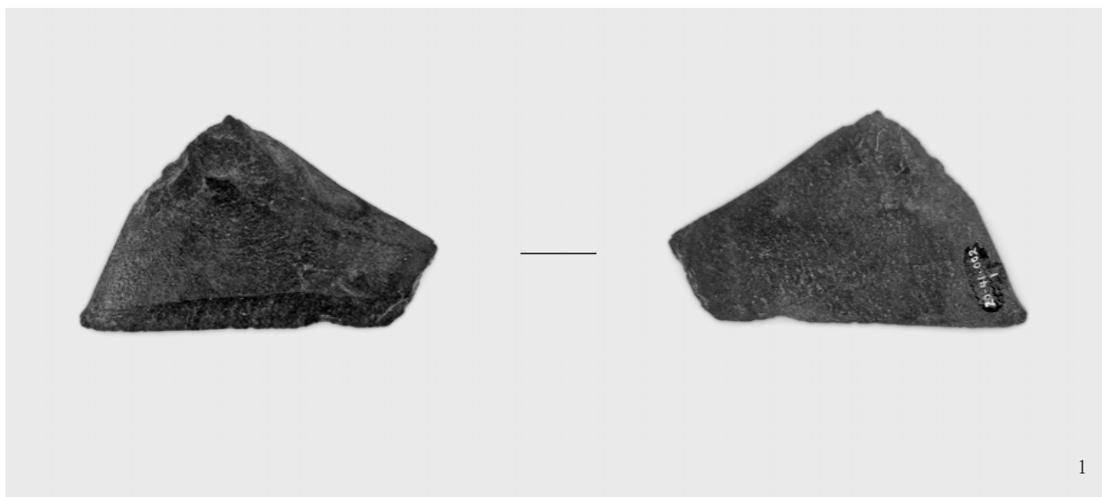
8 遺構23断面土層(東から)



9 遺構30断面土層(南西から)



10 遺構31断面土層(西から)



1



2



3



4



5



6

報告書抄録

ふりがな	たちのいせき							
書名	立野遺跡							
副書名	町道立野中道線外道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	——							
シリーズ名	——							
シリーズ番号	——							
編著者名	濱崎範子							
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1				TEL	073 - 472 - 3710		
発行年月日	西暦 2021 年 1 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たちのいせき 立野遺跡	わかやまけん 和歌山県 にしむろぐん 西牟婁郡 すさみちょう すさみ町	30406	002	33° 33' 14"	135° 30' 36"	20200928 ～ 20201030	188.3	町道立野中道 線外道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
立野遺跡	散布地	弥生時代	自然流路		石器		第2・5・6次調査で確認した自然流路の延長部を確認した。	
		中世～ 近世	土坑状遺構 小穴状遺構		土師器・瓦器・陶磁器		旧周参見川本流の氾濫堆積土層もしくは旧流路そのものの堆積層を確認した。	
要約	調査区1で検出した自然流路は、既往調査で確認した一連の自然流路の一部と考えられる。調査区2では、これまで明らかにならなかった立野遺跡南端部の様相が明らかとなり、旧周参見川本流もしくは支流が立野遺跡南端部を東西方向に流れていたこと、また近世以降にその流路が埋没した様子が明らかとなった。							

立野遺跡

—町道立野中道線外道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2021年1月15日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：株式会社 協和

和歌山県海南市赤坂5-3